

## Special Essay

### 肉体労働と学問のリンク

感染医学講座（真核微生物学部門）

井上 雅広

Apple の CEO でありパソコンを世に普及させた Steve Jobs 氏が presentation の準備に紙と鉛筆でアイデアをまとめているという事実を知り驚愕すると同時に“なるほど”と思った。また、15年ほど前に、Washington DC 在住の世界的に有名な研究者が、「某旧帝大からの多数の postdoc が来ているが、パソコンの前で誰かが paper にしたものを寄せ集めて、これに沿って実験を進めていくような姿勢の者が多すぎる。」と嘆いていたのを思い出す。博士はこれでは”新しいもの”がでないと確信していた様である。Lab bench work(所謂ラボでの肉体労働)から何か“トンデモナイ”発想が生まれ、それに沿って実験を組み立てる姿勢を重んじていたのだろうと推測する。さらに、私の娘と姪が「浜辺でクラゲをとってビニール袋にいれていたらクラゲが溶けてなくなった。」“大発見だ”と騒いでいたのを思い出す。結局、クラゲの持つ protease などのため死んだ後、自己融解を起こしたのだという事実を Web で知ることとなる。Internet が普及していなければ、彼女達は図書館でいろいろな本を読み、なかなか正解にいきあたらないので、他のクラゲに関する知識、生化学の知識を得ることができたであろう。さらにそれでも理由が分からなければ、実験を始めたかもしれない。ここでも、図書館で本を探して読む、という行動には肉体労働が伴う。大脳生理学的根拠は今一つだが、「手作業をすると、知能が発達するのを助ける。老人の痴呆の進行を遅らせる。」などという言葉をよく耳にする。手作業をしないで生きていくことができる現代社会は“人間がかつて、手を器用に使うことにより進化してきたこと”を忘れ去っている。

図書館で本を読む作業は、自分なりにそれをまとめて知識とする作業を伴う。いわゆる”Easy come, easy go.”を防ぐことができると私は確信する。さらに、

目的の情報を得る過程で、別の情報を得る機会が多いと思われる。(是非、学生さんには、図書館で text book を調べ、与えられたシラバスのみでなく、自分で体を動かし、能動的に知識を整理し自分のものにしていただきたい。) さらに Internet に頼らず図書館を情報源とすることの重要な点は、目的の情報が見つかるまで、我々に、考える時間を与えてくれることである。自分の足で図書館まで行き、自分の手で、重い本を運び、page をめくって作業する。文献を copy して file する。要点をまとめる。それら一連の肉体労働 (brain も肉体の一部である) こそ、現代文明が失いかけたものを取り戻すために必要である。図書館の利用はスピード制限された情報を得る方法として見直すべきである。

